

爆音轟く240発 23人死傷

戦後建てられた碑の前で、当時を振り返る飯田さん＝いずれも南房総市で



千葉から語り継ぐ戦争

①

安倍政権が自衛隊の海外での武力行使を可能とする集団的自衛権の行使を認め、憲法の平和主義が根底から揺らぐ中、終戦の日は六十九回目を迎える。二度とあんな悲惨な体験はしてほしくない。次世代に強く訴えかける県内の語り部を訪ね歩いた。

壕で家族助かる

「ヒューン」「バーン」。深夜の房総半島南端に爆音が轟いた。南房総市白浜町の飯田敏夫さん（87）は当時十二歳。「家の空き地に掘っていた防空壕に両親と子供六人全員が逃げ込んだ。爆

音に続いて土がさく裂してザーンと壕の天井に降り注ぐ。崩れないように下から両手で抑えたことが忘れられない」

「時間ほどたち、恐る恐る外へはい出ると、周りには直径二、三層はあるうるかという穴だらけ。「家族にけ

白浜の艦砲射撃

人がはなかつたが、すぐに山の方向へ走り、穴を掘って入りこんだ」

一九四五（昭和二十）年七月十八日。米軍は午後十一時五十二分、野島崎沖から白浜城山レーダー基地に向けて艦砲射撃を開始した。巡洋艦四隻と駆逐艦九隻の布陣で砲弾二百四十発を撃ち込んだ。飯田さんが「長く感じた」という攻撃時間は、たった五分間だったが、基地は破壊されなかったが、現在の白浜町白浜付近に三十七発が着弾。六人が死亡、十七人が負傷した。艦砲射撃の後、白浜には米軍が上陸するとの噂が流れたという。「どの家にも竹槍があり、これで撃退しろと言われた」。町にある戦没者や戦災死没者の碑を前に、飯田さんは振り返った。

今も生々しい痕

同町の星野幸枝さん（83）宅は艦砲射撃をいまに伝える。築約百二十年の旧宅で、亡夫の実家。居間の天井の梁には砲弾の破片が刺

さってできた傷が残る。六秒ほどの大きさの破片も保管している。

星野さんが夫から聞いた話では、攻撃の夜、家の近くに着弾し、居間の隣の二間はあつという間に吹き飛んだ。居間にいた夫の家族は奇跡的に助かったが、東京から疎開し二間で寝起きしていた親類夫婦が犠牲となった。六人の死者のうち

の二人だ。

「戦後家は改修したけれど、梁や柱は頑丈なのでそのまま。建て替える予定はない。傷は残っていく。戦争は二度と起きてほしくないから」と語る。

情報を隠す政府

終戦間近の白浜艦砲射撃。日本側に詳しい記録はいまのところ見当たらない。



砲弾の破片でできた傷が残る居間天井の梁を示す星野さん。奥の二間は、攻撃ときに吹き飛んだ

米軍、レーダー基地狙い

戦災を直接経験した世代の高齢化が進む中、県内でも知る人が多いとはいえない白浜艦砲射撃の生々しい証言や砲弾破片の傷などに接することができたのは貴重なことだった。

（北浜修）

取材後記

「バーン」。空襲や爆撃を経験した人が爆音を口頭で表現するとき、その迫力に驚かされる。突然、生死の境に追い込まれた極限の状況が語る人を通して聞く者に迫ってくるからであろう。来年は戦後70年。戦争や

い。元高校教師で、NPO法人安房文化遺産フォーラム（館山市）代表の愛沢伸雄さん（83）は、戦後五十年（九五年）の活動で調査をしていたころ、国会図書館保管の米側資料の中に見つけた。「米軍戦略爆撃調査団」が戦後の現地調査として、米攻撃の内容や日本側の被害などが書かれていた。愛沢さんは「国民を動揺させまいと軍や政府が詳細を知らせなかったことで結局、戦後も広く知られることはなかった。本土決戦に向けて房総は一触即発だったのではないか。射撃は終戦に向かう要因の一つになった可能性はある」とも述べている。